大学教養教育におけるプレゼンテーションの指導実践
―聞き手の理解を得るためのストラテジー指導から―

弘前大学　佐　藤　　剛

研究の背景

プレゼンテーションは、小学校から大学を通して、小学校、中学校、高等学校、大学と校種を問わず様々なレベルにおける英語の授業で実施されるスピーキング活動である。「発表者が聞き手の前に立って、英語を話す」というシンプルな活動である。

プレゼンテーションの課題

Listeners
- プレゼンテーションの内容を理解していない
- 聞いていない
- 自分のプレゼンテーションの準備や練習の時間

Speakers
- 緊張から聞き手の理解や反応などはお構いなし
- 用意してきたスクリプトを吐き出すように読み上げる

正確で流暢なプレゼンテーションであっても聞き手にその内容が伝わらないのであれば、その目的を達成することができない！

本研究は聞き手意識を持ったプレゼンテーション指導の一案として、聞き手の理解をモニター・促進する6種類のストラテジーを指導し、合計4回のプレゼンテーションおけるそれらの使用頻度と聞き手の理解度の変容から、その効果を検証することを目的とする。

研究方法

(1) 対象学生

対象学生は，弘前大学教養教育英語（週１回，90分授業）の受講生32名（男子18名女子14名）であり，初回のガイダンスの時間を除き，14回の授業を実施する。なお，指導の効果検証については，以下に示す発表活動であるBig picture descriptionすべてに出席した学生24名のみを対象とした。

(2) 指導手順

ストラテジーの指導

15回の授業を通して、以下の6種類のストラテジーを導入し、ペアワークやグループディスカッションなど授業の様々な場面で使用することを促し、継続的に練習させる。

①繰り返し
同じ表現を繰り返す（e.g., I don't want to try this activity because it's dangerous、dangerous.）

②言い換え
異なる表現に言い換える（e.g., Do you know base jumping? Sport of jumping with a parachute from high place, high building, bridge or edge of rocks, very thrilling sports.）。

③聞き手の理解のモニター
聞き手に自分の話していることが分かっているか確認する（e.g., OK? Do you understand?）

④日本語の使用
聞き手にとって難しい箇所を日本語で説明する（e.g., I saw a night view of one million dollars, a night view of one million dollars is 百万ドルの夜景 in Japanese.）

⑤ジェスチャー
うまく説明できないときに、身振りなどを使用する

⑥フィラー
うまく説明できないときに、沈黙せずに言葉をつなげて時間を作る（e.g., The highest jumper is popular with women, popular with women, ahh, umm, you know, ee… like Fukushi Sota umm women say "kyaaa".）

Big Picture Descriptionについて

授業の3回目、6回目、9回目、12回目に、学生はひとりひとりクラス全体の前で表1に示すテーマについて、図1に示す写真を説明する2～3分程度のプレゼンテーションを行う。それぞれのプレゼンテーション終わりに、教師はその内容に関する質問する。聞き手の学生はその答えをハンドアウトに記録する。それを回収し、正答した聞き手の割合を「聞き手の理解度」とする。

表１ Big picture descriptionに使用した写真の内容と評価基準

	写真の内容	評価基準
Big Picture Description 1（3回目の授業）	インドネシアの市場	1. 自分が市場で買いたいものを述べること 2. 買ったもので，作りたい料理について述べること
Big Picture Description 2（6回目の授業）	動物園の飼育員	1. 飼育員にインタビューするとしたらどのような，質問をするか述べること 2. 飼育員が，仕事をしながら，どのようなことを考えているのか，想像して述べること
Big Picture Description 3（9回目の授業）	マサイ族の伝統舞踊	1. マサイ族の伝統舞踊がどのような意味を持つのか，想像して述べること 2. マサイ族の1人が，仲間にどのような声をかけているのか，想像して述べること
Big Picture Description 4（12回目の授業）	クリフジャンプ	1. 自分はクリフジャンプに挑戦したいか，これまで行ったことのある最も高い場所はどこか，その時の気持ちを説明すること 2. ジャンパーの一人が飛び出しの瞬間に叫んでいることを想像して述べること

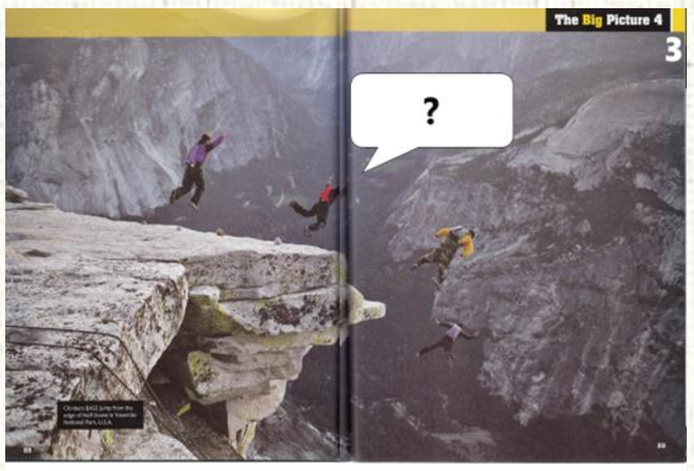

図１ Big Picture 4で使用した画像

発表の前の時間に学生に評価基準とともに提示する。学生は、この画像について、説明する２～３分程度のプレゼンテーションを用意し練習する。その際に、表１に示すように、自分はクリフジャンプに挑戦したいか，これまで行ったことのある最も高い場所はどこか，その時の気持ちを説明することと、ジャンパーの一人が飛び出しの瞬間に叫んでいることを想像して述べることが求められる。

(３) 分析方法

学生のプレゼンテーションをビデオ録画した上で、書き起こしを行い、ストラテジーの使用頻度をカウントする。ジェスチャー以外のストラテジーの使用頻度のカウントは、AS-Unit（The Analysis of Speech Unit）を用いた基準を採用する。ジェスチャーに関しては、動作の種類をカウントし、同じジェスチャーを繰り返しても、頻度は１とした。4回にわたるプレゼンテーションにおいて、それぞれのストラテジーの使用頻度と聞き手の理解度がどのように変容するのかを2元配置の分散分析を用いて分析する。

結果と考察

4回のプレゼンテーションにおける学生のストラテジーの使用頻度と聞き手の学生の理解の記述統計は表２に示すとおりである。

表２　Big picture descriptionの記述統計量（n = 24）

	１回目 *M(SD)*	２回目 *M(SD)*	３回目 *M(SD)*	４回目 *M(SD)*
繰り返し	0.00 (0.00)	1.25 (1.56)	0.75 (1.39)	1.25 (1.85)
言い換え	0.04 (0.20)	0.33 (0.76)	1.08 (1.44)	0.83 (1.47)
モニター	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	2.13 (1.96)	1.17 (1.09)
日本語	0.00 (0.00)	0.08 (0.28)	0.08 (0.28)	0.04 (0.20)
ジェスチャー	5.08 (4.34)	7.21 (4.75)	7.21 (2.28)	5.87 (4.09)
フィラー	2.13 (2.85)	1.88 (3.01)	1.17 (2.28)	1.12 (3.68)
聞き手の理解	8.66 (1.29)	7.35 (1.42)	7.23 (1.85)	8.01 (1.56)

プレゼンテーションの回数とストラテジー使用の頻度の関連を２元配置の分散分析により検討した。その結果は、表３のとおりであった。

表３　分散分析表（プレゼンテーションの回数とストラテジーの使用頻度

要因	*SS*	*df*	*MS*	*F*	*p*
ストラテジー使用頻度と聞き手の理解度	493046.30	6	82174.38	2204.65	<.001
プレゼンテーションの回数	268.33	3	89.44	2.03	0.115
ストラテジー使用頻度と聞き手の理解度 × プレゼンテーションの回	3372.12	18	187.34		<.001
誤差	20574.77	552	51.13		

多重比較の結果、１％水準で有意な差がみられたストラテジーは以下の通りであった。

聞き手の理解のモニター（３回目）＞聞き手の理解のモニター（１回目）
聞き手の理解のモニター（３回目）＞聞き手の理解のモニター（２回目）
ジェスチャー使用（２回目）＞ジェスチャー使用（１回目）
ジェスチャー使用（３回目）＞ジェスチャー使用（１回目）

学生は、1回目のプレゼンテーションと2回目のプレゼンテーションよりも有意に多く聞き手の理解のモニターを行っており、1回目よりも、2回目と3回目のプレゼンテーションにおいて多くのジェスチャーを使っていることが明らかになった。

聞き手の理解度において、１％水準で有意な差がみられたのは以下のとおりである。

理解度（１回目）＞理解度（２回目）
理解度（１回目）＞理解度（３回目）
理解度（１回目）＞理解度（４回目）
理解度（４回目）＞理解度（２回目）
理解度（４回目）＞理解度（３回目）

聞き手の学生の理解度は、1回目のプレゼンテーションにおいて最も高く、2回目、3回目と一度低下し、4回目において再び向上していることが分かる。以上の結果を図示すると、以下の図２のとおりである。

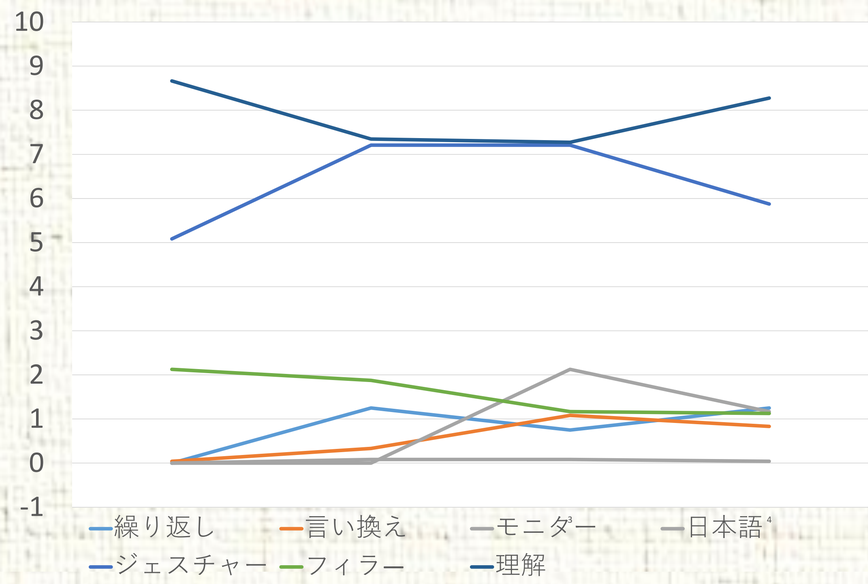

図２　プレゼンテーション回数×ストラテジーの使用頻度の交互作用

結論と今後の改題

ストラテジーの種類によって使用頻度やその変容には差があることが観察された。学生にとって、英語の運用能力に関わらず使用できる「ジェスチャー」が最も使いやすいストラテジーであること、聞き手の理解は、1回目から2回目・3回目と一度低下するものの、4回目に向上することが観察された。

本研究は15回の限られた時間の中で行った4回のプレゼンテーションのデータを分析した結果を報告したものである。さらに指導を継続した場合、どのような変容を見せるのかについては、効果的なプレゼンテーションの指導の在り方を模索する上で非常に興味深い。多くの研究において、その必要性が指摘されているように、より長期的かつ系統的なトレーニングとその効果検証の必要性を示す結果となった。